

民でありながら水戸藩主の侍講を務め、後世に残る  
図編集者、記録者として、貴重な報告書、紀行文な  
った人々、ゆかりの地などを取材した。(表紙記は満年齢)

# 長久保赤水 特集

## 伊能忠敬に先駆けて日本地図を編集 特に秀でていた情報収集と編集能力

### 生い立ち

長久保家のルーツは大分の大友氏とされる。戦に敗れて逃れ、静岡県駿東郡長泉町で長久保城主となった。ここで長久保を名乗って何代か続いたが、北条氏綱に滅ぼされてしまい、最終的には赤浜で帰農した。  
赤水の俗名は源五兵衛。一七二七年(享保二)父・善次衛門、切碇琢磨して、のちに松岡七賢(七友)と呼ばれるようになる。

### 赤水図

「赤水図」と呼ばれ、江戸時代田川(現在の夏井川)「サヌ川」(鉾川)が確認できる。さらに「改訂本輿道路程全図」は三十四歳のころから着手し、約三十年の歳月をかけて六十二歳のときに完成させた。そのきっかけは、いわきの寺「論語古訓」の講義をするために招かれたときに、道に迷ってしまっただことだと言われている。そのときに、細かい情報の必要性を痛感し、地図を描き始めたという。さまざまな資料を集め、家の前を通る旅人を呼び止めて話を聞くなどして情報を蓄積し、街道、宿場、地名などを書き込んだ。地図づくりで大きかったのは、松岡城下に医師・鈴木玄潭による向上心に理解を示し、温かく見守ってくれていた。



赤水は生涯に大きな旅を三回している。まず、四十三歳のときに東奥(東北、新潟)、五十歳のときに京都、大阪。なかでも興味深いのは長崎で、北茨城の野口家の船「姫宮丸」が嵐に遭って安南国(現在のベトナム)まで流され、生きが死亡を、名主代理として、水戸藩士なども含め総勢二十一人で

### 赤水と旅

赤水は生涯に大きな旅を三回している。まず、四十三歳のときに東奥(東北、新潟)、五十歳のときに京都、大阪。なかでも興味深いのは長崎で、北茨城の野口家の船「姫宮丸」が嵐に遭って安南国(現在のベトナム)まで流され、生きが死亡を、名主代理として、水戸藩士なども含め総勢二十一人で

長久保家は戦国時代、静岡県駿東郡裾野町に城を築いて、部下を養っていました。どこが東に北条、北は武田、西は今川に囲まれていて、最終的には小田原の北条に攻められて船でこちらに逃げてきました。上陸したのが小名浜だったそうです。  
その後、渡辺町泉田にある岡部城、勿来の窪田城、北茨城の車城などを継ぎ、赤浜で帰農しました。関ヶ原の戦いが終わり、流浪の大名ではだめだと思っただけでしょう。それが一六〇五年(慶長十)です。  
赤水は六十歳のときに、六代水戸藩主・治保公の侍講となり、八十歳まで、江戸小石川の水戸藩邸で暮らしました。侍講が終わったあとも、水戸光圀が始めた「大日本史」の地志を担当して、仕事をしていたのですが、体を心配した子どもたちから「早く帰って来よう」と言われ、赤浜に戻りました。そのときから住んだのが私の家で、七十三歳の

長久保赤水が生まれた家は「誕生地」という石碑があります。その家は長久保家が赤浜に来て最初に住んだ家ですが、本家は江戸時代に水戸へ転居してしまっただめ、一族が順番に屋敷跡を守っています。現在住んでいるのは長久保源蔵さんです。赤水の父・善次衛門はその家の次男で、赤水が七歳のころに分家して家に移りました。転居したのは、私の家の前にある家で、六十一歳までそこで農業をしながら学問に励んでいました。

長久保 和良さんのはなし

肉親が早くに亡くなったので健康にはとても気を遣っていた

